

第1班 テーマ「The 湧別 ライフスタイル」

参加メンバー(敬称略) 越智 豊、青柳圭介、野津玲子、高田政人、深沢繁子、長谷川 雅浩

0. ライフスタイルは難しい

- ・みんなに共通するようなものは難しい見つからない
- ・どんな暮らしを楽しんでいるか探してみる

1. 自分でやる人が多い

- 家庭菜園
 - ・多くの人がやっている
 - ・自分の作ったものを人に分けることもある
 - ・自分の作ったものと魚介類の交換が成立するまち。
 - ・物々交換ができる人のつながりがある。
- もの作るのが好き
 - ・漬け物はだれでも作ってる
 - ・作ったものを人に食べてもらう
 - ・そば打ちを仲間でやっている
 - ・年末には20kgのそばを打ち、知り合いに食べてもらってる
 - ・そば打ちが人のつながりを広げてくれる

2. 交流機会がある

- スポーツを楽しむ
 - ・スポーツ(野球)に参加している。ナイター設備があり仕事が終わってから楽しめる。
 - ・いろいろなスポーツの協会が大会を開いているので参加意欲がわく
- 子どもと楽しむ
 - ・子どものスポーツも盛ん。セタやハロウィンなど子どもと楽しむ取り組みが地域で行われている。



3. イベントに遊びに行く

- 祭り
 - ・産業まつりには町内外から人が集まり、盛り上がる
 - ・産業まつりでは鍋料理をみんなでつくる
 - ・以前には味祭りもあった
 - ・地域の人が集まるイベントは大切。交流のきっかけとなる。



4. なかまと楽しむための取り組み

- - ・楽しみの仲間は年を取っても付き合いえる。
 - ・交流で生まれた人のつながりが暮らしを楽しくする財産
 - ・自発的にイベントに参加する、イベントにかかわることが大事

【1班ファシリテータからのコメント】

「ライフスタイルといわれても・・・」とテーマに戸惑いながらも、自分たちの普段の暮らしの中でどんなことを楽しんでいるかという問いかけには、皆さんそれぞれの楽しみを持っていました。まちの施設や環境など豊かなものがある湧別町ですが、やはり一番は「人」ではないでしょうか。湧別町の特徴として「人がいい」、「のんびりしている」などがあげられていましたが、人付き合いを楽しめる、その輪を広げられる湧別町民は楽しみ名人がそろっているように思います。

■目の前に見つける

楽しみはどこにでも見つかる、創れるという気持ちが必要。湧別町の方々はこの町にあるもの、いる人の中に楽しみを見つける力があるようです。あとは、積極的に人を巻き込んだり、参加する機会を創ったり、発信することでより広がりをもつものと思われまます。

■参加意識の醸成

与えられた場になんとか行くのではなく、自分も主役の一人ということに気づくことでより積極的な意識を持てるようになります。この意識改革は自分ではなかなか出来ません。先輩、リーダーのような立場の人が次に続く人を育てていくことも必要です。

■「楽しみおすそ分け」ー共有のライフスタイル

家庭菜園にしても、そば打ちにしても自分が楽しむだけではなく、人にも楽しんでもらおうという「心からのもてなし」が自然にできる、そういうライフスタイルが根付いているのでしょうか。湧別町の特徴として育て、広めていってはいかがでしょうか。

■今後に向けて

ワークショップの終了時に、「他の班の議論も含め実現していくには難しいハードルがたくさんある。良いことばかり話さないで批判もしながら議論を続ける必要があるのではないか」といった意見もありました。ワークショップへの期待としてうかがいました。このような議論が住民参加のまちづくりの第一歩となります。ワークショップを開催したことをより実りあるものとするために継続的な機会にしてはどうかと考えます。

第2班 テーマ「人のつながりを再構築する」

参加メンバー(敬称略) 久野三男、板垣桂子、伊藤 護、伊藤厚子、柳沢勝彦、松村博文

0. 人のつながりが無くなったのはなぜ? ~背景~

- ・プライバシーの尊重など社会環境が変化してきたから。特に市街地の新規住宅地区で顕著。
- ・飲む場所が無くなったから(居酒屋などの衰退)。飲酒運転をしなくなったので、郊外では集まって飲みにくい

1. 湧別町での人のつながりの状況

- ①人のつながりが無くなったと感じること
- 高年齢者や若者の地域からの孤立
 - ・孤独死があった
 - ・顔が分からず、声もかけられない
 - ・新興住宅地では、引っ越し時に挨拶もなくなっている
 - 地域行事の衰退
 - ・神社や施設の清掃に人が集まらない。特に若者で顕著
 - ・地区行事での集まりが少ない
 - あいさつや感謝の気持ちの伝達
 - ・挨拶やありがとうという言葉が返ってこない
- ②つながっていて良かったなあと思うこと
- 相互扶助
 - ・困ったことがあった時に聞いたり頼んだりできる
 - ・高齢者世帯で病人が出た時、地区内で助け合っている(病院の付き添い等)
 - ・道を聞いた時、わからなければ他の人に聞いて教えてくれる
 - ・笑顔と笑顔で接しられるとき
 - 多世代の交流
 - ・朝の街頭指導(交通)で、子どもと挨拶や話ができること、また、子ども達から感謝の手紙をもらえたこと
 - ・保育所、小学校、中学校の合同で、地域ぐるみ運動会ができること(人口が少ないからできる)
 - ・スクールバス内で、小中多学年での交流ができる
 - ・中高一貫校は縦のつながりができる
 - 地域行事の維持
 - ・開基開校百年記念式典で若い人が参加してくれると
 - ・お盆のパーティで、帰省している子どもや孫など、大勢集まり大盛況



2. 求められるコミュニティのイメージ

- 困った時、助けを求められる
 - ・昔のような濃密な関係は無理。ある程度はプライバシーを確保しつつ、困った時に声を出せるような関係。例えば、灯りなどで、暮らしの気配がわかりあえ、何かあった時は、助けを求められるような関係



3. 対応方策「どうしたらつながることができるか」

- 子どもを潤滑材に
 - ・子供会で廃品回収を行うと、みんなが協力してくれるし、子ども達も地区の大人と交流ができる。さらに、達成感を持てる。また、自分の存在が認めもらえる
 - ・神輿担ぎの担い手の子どもに五千円だしても、参加してもらうと盛り上がる
- 地域行事のあり方 ~なぜ、人が集まらない行事と、盛況な行事があるか~
- やりがいや楽しさ、達成感
 - ・子供会の廃品回収は、地域の役に立つので子どもがやりがいを持って参加でき、自分の存在が認められ、達成感を持てる。
 - ・神社の清掃などは、その必要性を伝えるとともに、清掃後に飲み会を設けるなど、楽しめるような工夫が必要、特に男の人は、飲み会がだいじ。飲み会ができる場をつくる
- 行事の内容、企画
 - ・「ふるさとを考える会」は、まち歩きで湧別町の宝探しを行い、湧別町の素晴らしさを実感できる、興味のわく企画で、参加者も多世代で盛況。
 - ・真剣さがなくなるので参加料のタダはダメ。有料でも集まるようなイベント企画がだいじ
- 伝える内容、伝える方法
 - ・つながっていないことの問題だけではなく、つながっていて良かったことを積極的に伝える。
 - ・行事や活動への参加を募る際に、紙媒体(回覧板)だけではダメで、Face to Face で、意義などを伝え、お願いする(ホタテの無料配布は、人の名前もわかり、Face to Face で接触できる良い機会)
- つながりをつくるターゲット
 - ・つながりたくない人は、とりあえず後回しにし、つながりたいと思っている人をターゲットにする

[2班 ファシリテータからのコメント]

人につながり(地域コミュニティ)の再構築の必要性は、東日本大震災などを契機に、さまざまな場面で語られています。実現することは、簡単なことではありません。今回のワークショップでは、現状(問題点)や人の子ながりの重要性、再構築の方策について、時間のないう中で議論しました。そこで、本WSで出された対応方策を実現していくために必要な取り組みを提案します。

①人の子ながりの実態の洗い出し

■人の子ながり状況の見える化

同じ町内会の子どもの顔や名前(苗字)をどのくらい知っているかを、町内会行事等の際にアンケート等により把握する。これを、経年的に把握することにより、行事の企画の見直しや、状況の変化や、取組の成果が明らかになります。

■人の子ながりが無くなったことで困っていることの洗い出し

今回のWSでも行いましたが、一体、何が困るのかを全町的にアンケート調査等により把握します。それにより、現在は人の子ながりが不要だと考える若者が将来的には困ることを理解してもらえます。

■人がつながっていたことで良かったことの洗い出し

今回のWSでも行いましたが、つながって良かったことをアンケート調査や定常的に情報が集まるようにして、発信することにより、それにより、人の子ながりの重要性を理解してもらえます。

②企画力の向上と成功事例の集積

■地域行事などの見直し

楽しさ、やりがい、自分を認めてもらえることなど、地域行事の内容や方法などについて見直すため、その企画力を向上する必要があります。そのために、先ずは、地域行事の内容と参加状況などを把握します。次に、セミナーやワークショップにより、よく参加する行事とそうでない行事の要因を考えたり、具体的な改善策や新たな取り組みを検討します。さらに、それを実行し、成果を評価検証し次につなげます。

■事例の収集と発信

うまくいった事例や失敗事例の情報が集まる仕組みを作ります。例えば、全町の自治会が集まる会合などで、単なる実施した行事の報告だけではなく、困ったところ、うまく行ったポイントなどの情報を収集発信します。

第3班 テーマ「湧別の食材をビジネスに」

参加メンバー(敬称略) 石田佳宏、越智祥子、工藤雄希峰、横幕あや子、福井淳一

1. 湧別の食材
 海産物・農産物が揃う
 種類が多い

■特産品
 ・北海しまえび(サロマ湖でしか取れない)
 ・ほたて
 ・タマネギ

■海産物
 ・バフンウニ(道内でも取れるところは少ない)
 ・牡蠣
 ・タラバカニ、毛ガニ
 ・シジミ、タコ、サケ、イカ

■農産物
 ・タマネギ
 ・長カボチャ
 ・ジャガイモ
 ・グリーンアスパラ
 ・ブロッコリー
 ・牛乳

■畜産物
 ・牛肉(湧別牛)

2. 加工品

■種類が多いことを生かす
 いろいろな食材を同時に味わえるもの

- ・ピザ
- ・お好み焼き
- ・ハンバーガー
- ・たこ焼き(たこのかわりに湧別の食材を入れる)

■加工品として売れる視点

- ・健康
- ・手作り
- ・限定品
 期間限定・地域限定

■はね品の利用

- ・野菜などはね品
- ・水産加工の途中で出たはね品
- ・まとめて格安で売る

3. 加工品の販売方法

■売り方

- ・道の駅で販売
 土日の野菜市を開催している
- ・インターネットで販売
- ・直売所
 無人直売所だと経費がかからないので

■宣伝方法

- ・一度特産品として有名になれば、販売に弾みがつく
 北見の塩焼そば
 (北見市は常呂町と合併したので海産物が地場産食材になった、海のもの山のものを同時に入れることが)
- ・販売所などを雑誌に掲載
 「じゃらん」などに掲載されただけで人の入りが違う
- ・ネーミングの工夫
 人をハッとさせるようなネーミング
- ・販売所やお店への誘導看板
 小さくてもおしゃれな看板、誘導看板をある程度の間隔を置いて続けることにより自然に誘導。
- ・販売所やお店のガイドマップを作る
 どのお店に行っても置いている。町全体で協力

加工品開発の問題点

■問題点

- ・商品開発しても売れないことが多い
- ・どの商品が売れるのかを見極めるのが難しい
- ・今の仕事で忙しくなかなか手が回らない

【3班ファシリテータからのコメント】

■過去の取り組み

以前農家がアイスクリームの販売などを実施したことがあったが、思うように売れなくてやめてしまったなどの指摘がありました。積極的にアイデアが出された反面、どのような商品が売れるのか見通しが見えない状態で、物事を進めることに対する不安も感じられました。

■人材

商品開発については、町外などの第三者に評価をしてもらうなども検討すべきと感じました。

■労力との兼ね合い

既に一次産業を生業として広い意味での食品販売をしているので、既存の流通に乗らない販売は必ずしも効率が良いものではなく、新たな取り組みをしても労力がかかるといふ指摘もありました。実際に何かに取り組むとすれば、新たに労力がかかり、それに見合った収入が得られなければ、生業により労力をかけた方が効率がよく、新商品開発の難しさを感じました。

■町のサポート

町が何をしてくれるのか、アイデアを出しただけで終わらないかという指摘がありました。自分たちでできることを挙げ、それを具体的に検討した上で町にサポートしてほしい点を明らかにする方向で考えることを提案したところ、自分たちでやらなければ進まないという意識で積極的にアイデアが出されたとおもいます。

■地場食材の利用のネットワークづくり

今回のワークショップでいろいろな加工品や販売に対するアイデアが挙げられましたが、今回だけでは具体的な商品開発や販売にはつながらないため、継続的に住民・組織同士のネットワークや検討の場づくりが必要と感じられました。特に2つの農協と漁協の活動に興味がある人が参加する共通の場が必要と感じました。

第4班 テーマ「湧別らしい教育環境づくり」

参加メンバー(敬称略) 本間義輝、花木孝代、佐々木勝雄、廣井隆志、梅田唯士、馬場麻衣

1. メンバーの想い
— 湧別高校をなくしたくない!! —

- ・母校だから、愛着
- ・湧別町にとっての象徴(合併前の共同事業)
- ・町内の経済活性化のため
先生が住む、生徒が使う、税金など
- ・親としての負担軽減
- ・青春の時間を有効に使ってほしい(親サイド)
子どもは“受験いらす”=楽ちゃんという認識

0. 背景

【子どもの減少】

- ・現在、湧別高校は各学年2クラス50人程度
- ・中学校は各学年40人程度
- ・湧別小学校は漁業の後継者の子どもが転入し増しているが、中・上湧別小学校は減少

【湧別高校の歴史】

- ・旧湧別町・上湧別町が共同で北海道に「中高一貫校にしたい」と申し出た、市町村合併前の象徴的なできごとだった。

【なぜ小・中ではなく「高校」に着目したか】

- ・子どもの減少を考えた中で、高校から町外に出る子どもが増えるとそのまま湧別に戻らない可能性が増え(社会減)町内人口のさらなる減少につながると考えた。
- ・時間が限られているため、学童保育の特色的な取り組みなどはあるが、湧別の教育として特徴的な中高一貫教育について議論することにした。



2. 湧別高校の良さ — 小規模校 —

【きめ細かい指導】

- ・中学で落ちこぼれて、湧高にしか入れないと上がった子どもでも、その後のフォローにより勉強についてけるようになる

【進路100%—キャリア教育】

- ・ひとりひとりに対して進路指導してくれる時間が多い。

【チームワーク】

- ・文化祭やボランティア活動など、チームで取り組めるものが多い。

【近年その良さが認められつつある】

- ・昨年は、町内の中学生の6割が湧高に進学(前年は半数以下)。
- ・ただし、部活動のために外に出る子どももいる。



3. 課題
— 中高一貫の良さが活かしきれていない —

【中高一貫のメリットとは】

- ・コミュニケーション能力がつく
中高協働の行事により先輩後輩とのつながりができる
- ・キャリア教育としての継続性
6年間毎年、ボランティアや職業体験を積み重ねることが大切
- ・カリキュラムとしても特徴が作れるのでは?
時間がかかる言語(英語)教育や芸術(音楽)などを6年間継続すれば力になる
部活にも特色を付けよう
例)ラグビーなど

4. 私たち一人一人にできること — 地域の大人にも想いを広めよう —

【文化祭パレードを見に行く、山車を出す】

- ・かつての中学生にとって湧高の文化祭パレードは憧れだった。
- ・今は、表通りを通らなくなったこともあり、あまり盛り上がりがない。>>>表通りに戻そう!!
- ・地域の大人が地域の子どもの知らない
- ・家族に高校生のいない大人も、山車を出すことで参加し、高校生と知り合う

【自分の職場に職場体験を受け入れる】

- ・湧別の中学生から高校生まで6年間かけて様々な職業を体験するために、私たち自身ももっと職場体験を受け入れよう。出前授業の先生も。

中学と高校がもっと近づき、地域みんな地域の子どもの育てよう!

[4班 ファシリテータからのコメント]

将来の湧別を担う子どもたちのために、今私たちがどのような教育環境を整えたらよいかという視点で議論が始まりました。もう少し時間があれば、中学校や小学校についても触れたかったところですが、今回は湧別高校の中高一貫教育の取り組みについて、班のメンバーひとりひとりが実際にどう行動するか、まで提案できたことが非常に良かったと思います。

■文化祭パレードについて

提案にあったように、大人ひとりひとりが高校の行事に参加し、地域の子どもの顔と名前を覚えることからはじめましょう。湧別高校の生徒は、約160人です。全員を目指すのも不可能ではありません。

顔と名前を覚えてもらい、パレードのときには声をかけてもらい、職業体験のときには親身になってくれる大人が地域にいることは、例えその子が一旦就職や進学で町外に出ても湧別に愛着を持ち、いずれUターンしてくれることにつながるかもしれません。すぐに効果の現れることのない地味な取り組みですが、非常に重要なことだと思います。

今すぐにでも始められることをまとめてみました。

- ①まずは、来年パレードを見に行ってみましょう。
 - ②町内会、所属団体、職場などで山車を出せないか検討してみましょう。
 - ③中学生や子供会の参加の可能性を町内で検討してみましょう。
- 地域みんなで地域の子どもを育てる一歩につながることを期待します。

■職場体験について

また、湧別高校の特色に関して、キャリア教育に関するアイデアがたくさん出ました。現状では、中学生が半日、高校生が二日間職場体験を実施していますが、特色というには十分ではないだろうという意見もがあがりました。

せっかくの中高一貫教育で6年間あるのだから、6年間で様々な職業を体験し、高校生になるともっと長期でインターンシップさせてもらう仕組みができると素晴らしいと思います。学校側に要望することも一つですが、当日出たアイデアのように、自分自身が職場体験を受け入れるプログラムを作ってみましょう。一人の中学/高校生を数日受け入れる場合、どんな仕事を体験してもらうか、具体的に検討してみましょう。

出張授業の先生になる、というのもいいアイデアでした。『13歳のハローワーク』という本が流行ったように、子どもたちに世の中にはたくさんの職種があり、それらすべてが社会を支えているんだと伝えるいい機会になると思います。そこで出会った優秀な人材をリクルートできるかもしれません。

■中高一貫の特色について

町内に高校がひとつもなくなると、高校生だけでなく、その家族も町外に転出してしまふ例があるそうです。生徒数は少なくても、湧別高校を残したいというのがメンバーの思いでした。ただ、今は“受験のいらない”高校という認識で、学力が優秀な子、目的の部活がある子は町外の高校に通っています。同じ“連携型”の一貫校でも、全国には特徴的な取り組みをしている学校がいくつもあります。部活動を共同で行ったり、文化祭・体育祭を合同で行ったり、高校生からのチーム・ティーチングに取り組んでいるところもあるようです。

当日は時間が足りませんでした。今後も先生方だけでなく、地域の大人みんなで支えられる湧別高校らしい中高一貫教育の取り組みが進むことを期待します。

第5班 テーマ「高齢者のしあわせ暮らしづくり」

参加メンバー(敬称略) 北村茂、山口甲介、如澤 厚、古谷智子、小川征一、石井 旭



[5班 ファシリテータからのコメント]

湧別町では、高齢の方々が生き生きと暮らしていくために、「自分たちにできること」から既にアクションを起こしており、活動の輪は有志のつながりにより着実につながっている様子が見えてきました。

若い方にとっては考えにくいテーマだったかもしれませんが、老後も地域で住み続けたいと思うためにはどんなものが必要か、また、年上の方に学びたいもの、尊敬する点は何なのか、そういった点から考えてみると良いと思います。

次の取り組みとして、以下のことについて検討して見てはいかがでしょうか。

■地域での見回り活動について

見回り活動については、既に一部の自治会で取り組みを始めているようですので、さらなる普及に取り組んでいければと思います。4日に1回、あるいは今週は〇〇さんの当番、などしっかりルールを決めて運用していくことが大切です。報酬の仕組みも検討してはいかがでしょうか。

■多世代が集い、楽しく、自分を高められる場づくりについて

既に活発に活動を展開されている様子なので、さらなる普及に取り組んでいければと思います。また、特定の方に企画や運営が偏ってしまうと、過度な負担や、不在時の対応が困難になるなど、活動の継続が難しくなることがあります。進め方のマニュアル化や共有と、若い世代の参加促進を意識すると良いと思います。若い世代の参加については、「若い世代が参加しやすい環境づくり」を考えてはどうでしょうか。若い世代に直接意見を聞いても良いですし、子育てや料理など若い世代の関心ごとを活動のテーマの一つにするなどが考えられます。

■物々交換の仕組みや知恵・技術の継承の場づくりについて

地縁が浅い世代も増えてきているなかで、非常に重要な視点だと思います。また、地域の知恵や技術は、観光の面でも有効です。観光は、今までの通過型から、地域の文化や食材、料理などをゆっくりじっくり体験する形態に変わってきていますので、観光面からのPRも考えてみてはいかがでしょうか。また、地元料理をレシピ本として発行している地域もありますので、知恵や技術を形にしていくことも有効と思います。

■交通問題について

非常に難しい問題ですが、既にある公共交通をいかに利用するか、また、自分たちで解決できることは何か、公共サービスではどこまで可能か、自治体の方々と相談しながら考えていく必要があります。

■集まって暮らすことについて

生まれ育った地区を離れたくないけど、集まって住むメリットを得たいという問題を解決するため、各地区において集まって暮らすことを考えていくアイデアです。一方、集まって住むことは、高齢者向け集合住宅を建設することだけが解決策ではありません。地区内に食事を配膳してくれる場所がある、集会できる場所がある、気軽に相談できる場所がある、など「集まって住んだときの利便性」を提供できる仕組みを地区内で作り出していくことも考えられます。これは、地区の若い方や地区外も含めた様々な職種の方と一緒に検討を深めていく必要があります。

第6班 テーマ「環境の魅力をビジネスに」

参加メンバー(敬称略) 石渡輝道、平田弥、安本崇、後藤晴美、野津哲弥、尾山弘

0. 自然との共生から考える

- ・湧別町は自然に生かされたまち ～ 自然は維持できるのか
- ・永遠に1次産業を持続したい思いがある

1. 今の姿

- 湧別町は自然に生かされたまち
- ・サロマ湖、湧別原野、オホーツク海、湧別川の自然がある町。
 - ・100年前に開拓され、苦勞して1次産業を確立した歴史を持つ町。
 - ・今この町は、サロマ湖、湧別原野、オホーツク海、湧別川の自然の恵みを受け漁業、農業、林業など第1次産業を中心として暮らしている。



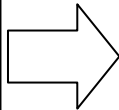
2. 100年後の夢

- 永遠に1次産業を持続したい思いがある
- ・100年後も今のような自然を守り、農林水産業を営んでいたい。
 - ・100年後の子孫に自然と共生した第1次産業を引き継ぎたい。



3. 不安や心配

- この自然は持続できるのか不安
- ・サロマ湖のヘドロ堆積は魚介類に悪影響無いのか？原因は何か？
 - ・畜産規模拡大で飼育頭数は増加するが、糞尿処理は適切なのか？悪臭対策は？
 - ・永年農薬を使用するときに自然に与える影響は？
 - ・無秩序な森林伐採で鉄砲水の発生はないのか？



既存の自然資源をビジネス化するのではなく、100年後の将来像に向かって活動する住民の姿、町の姿をビジネスチャンスとする計画

4. 一次産業の継続へむけて

- 【調査研究】
- 1次産業持続のため科学的な調査研究と不安課題の解消策の検討
- 外部研究機関、研究者、学生との交流から先進的研究エリアの提供ビジネス創出



5. 湧別モデルの確立

- 【実践モデル確立】
- 永遠に自然と共生できる町独自のオリジナル産業モデルを確立
- 自然共生技術とノウハウを蓄積し、先進技術の販売ビジネスを創出



自然と共生したまちづくりを観光資源に活用→ビジネス化

6. 過去を知り、未来へ引き継ぐ

- 住民活動
- 実践モデルをめざして自ら活動し実践する姿、自然を大切に作る姿、そこから生まれる町並み
 - 過去を知り今を見つめ未来を描く。自然と共生してきた開拓の歴史(JRY 活用)。この活動は子供の学習教材とし、後世へ伝える。

【6班 ファシリテータからのコメント】

「環境の魅力をビジネスに」という大きくて捉えどころのないテーマに対して、最初メンバーは焦点をどこに絞り込んで、どのようにビジネスを考え出したらよいのか？何から手を付ければよいのかわからない状態でした。

KJ法によるアイデア出しでは個人ワークに時間ばかり費やしてしまい、貴重なメンバー間の議論の時間も少なくなってしまうそうだし・・・

選んだ方法は、ビジネスを作る方法論を論ずることはバツサリ省略して「湧別町の環境の魅力」というフレーズから感じる、思うこと、考えること、何でも良いのでメンバーでフリートークしてみようということでした。

とにかくメンバー同士で話してみるところから始めてみたわけです。

■まさにフリートークから生まれたアイデア

メンバーの構成は漁業、農業、商工業、飛び入り自治会関係者、公務員とバラバラ。当然、各メンバーが抱く「魅力ある環境」の受け止めやイメージもまたバラバラ。フリートーク前半は主要産業である第1次産業が農林水産それぞれの分野でサロマ湖、オホーツク海、湧別原野、湧別川の自然環境から恩恵を受けている事例報告や、各分野の現在の課題や将来の不安が話されました。

いわば各産業の現状の報告会に終始していたわけですが、サロマ湖の水質はどうなのだろう？という話題から、サロマ湖の水質を語るには上流部での山林伐採や農地からの悪水流入、あるいはサロマ湖の養殖のあり方まで話が広がり、結局のところ、湧別町の農林水産の各分野の経済活動がお互いに水を通じて影響しあいながらも、湧別町の現在の自然環境から恩恵を受けているんじゃないの、今ある自然環境の中で今の農林水産業が成立しているんだよね。という部分に到達しました。

途端に話はドンドン広がってゆき、「100年後も自然と共生できる町独自の産業モデル構築を新たなビジネスに結び付ける」とのアイデアが生み出されることとなりました。

■環境維持を目的とする産業間連携が今後の課題

100年後も自然と共生できる町独自の産業モデル構築を新たなビジネスに結び付けるには産業間連携が今後の課題となります。

従来の経済効果を目的とする産業間連携ではなく、自然との共生や自然環境の維持を目的とする新しい形の産業間連携が必要です。

まずは、産業の壁を越えた議論の場や組織づくりからはじめる必要があると

思います。

現にこのアイデアが産業の壁を越えたメンバーのフリートークから生まれましたので間違いありません。

■今を知り未来を描くには過去の歴史を知ることが重要

将来も自然と共生できる産業モデルを創造するためには、現在の産業の実態を正確に把握すると同時に、どうやって現在の姿まで産業が成長したのかを学ぶ必要があります。なんの知識も無く未来を予想するのではなく、過去に学び未来を描くことが重要です。

幸い、湧別町には開拓史を中心に充実した展示や活動を行なう「ふるさと館JRY」がありますので、この施設を産業史学習の基地として位置づけ、あわせて産業間連携の基地としての機能を与えることも考えられます。又、子供へも自然環境と産業史のかかわりの学習機会を提供することから、自然との共生を未来へ引き継ぐための足がかりとすることも重要です。